

矢来篝

ずらりと高層ビルが立ち並ぶ街のすぐ近くに、いつもスーツを着ているサラリーマンのお父さんと、おかみさんと三人の子どもがいました。子どもは三人とも女の子で、長女は紅麗空、次女は来夢、三女は凜、と両親はそれぞれ名付けました。読み方は長女から順番に、クレア、ライム、リン、です。

一家のおうちは一軒家でしたが、お金が足りないので住宅ローンを組んで借金をしていました。最近では、ただでさえ貧しいのに、お嬢さまが行くような私立の小学校に三人とも子どもを行かせたため家計が火の車になっています。

もう半年も銀行へのローン返済が滞っていて、毎日決まった時間、朝の九時過ぎと昼の十五時前に一回ずつ怖い男の人の声が電話で聞こえてきます。そのせいか一家では毎日のように言い争いが起こります。

「だいたい、おかみさんが「なんで最近はこの電話がかかってくるのかしらね」と言ってる、お父さんのお顔を伺うところから始まります。お父さんは「なんだ、それは俺の稼ぎが少ないって意味か」と不機嫌そうに返事をします。

お父さんは先月、会社の重役のポストに就任したのですが、その責任の重さと管理職への適性のなさにうんざりして、ただでさえ胃がキリキリと痛んでいるのです。そこにおかみさんの愚痴がくるとたまったものではないのでしょうか。ついついダメだとはわかっているのに、たまたまらず続けて次のように言い返してしまいます。「そもそも、おまえが三人とも本物のお嬢様が通うような私立の学校に行かせたのが悪いんだろ。俺は、こうなるってわかってたから反対したんだ。それを、お前がどうしてもつていうから……」。

すると、おかみさんも「そんなこと、あなた一言も言っただけじゃない！ 『そういうことは全部おまえに任せるよ』って言うだけ！ だから私は別に悪くない！ だってあなたがそう言ったんだから！」とややヒステリックになりながら応酬するのです。

喧嘩は、お父さんが夜遅くに帰ってから日が変わるまで一階ですうつと続きます。

三人の子どもたちは、だから夜遅くになると二階にある各自の部屋に決まってこもります。両親が喧嘩する姿を、できるだけ子は見たくないと望むものなのです。そして、たまに今日のように三女のリンのお部屋に三人とも集まって話をする日もあります。なぜリンのお部屋かというと、それは姉の特権のようなものです。また、リンの部屋には、ベッド一台に両手両足の指で数えられる程度の服にぬいぐるみ一個しか物がないため、三人の娘が話し合う場所が十分にあるというものもあります。けれどリンがお部屋を提供するかわりに、二人の姉はお菓子を持ってきてくれるので、お互いに得をする、いわゆるウィンウィンの関係でした。

この日の会議では長女のクレアが先陣をきって「ねえ、また聞くんだけど、お父さんとお母さんの喧嘩をなくすのに、なにか良い方法はあるかなあ？」と二人に聞きま

した。すると次女のライムはチョコレート菓子で汚れた手をハンカチで拭いてからバシツと手を上げて「はい、もうリコンしちゃえばって思います！ そのショーコに、お父さんもお母さんも毎回喧嘩の最後には『じゃあ離婚！』ってお互いいます！ でも『ごめんそれは言い過ぎた』って、またお互い謝るのよね。ふしぎ。もう別れち



しかしライムは「いや、ないだろ。ここらへんにあるんじゃないわってところは、そのセンジンだかなんだかがあるう掘っちゃってるだろうし、それじゃああとはハズレっぽいところばっかじゃん。そんなの掘り当てるって無茶だ。埋蔵金グットする前にお亡くなりになっちゃうって三人とも」と自分の意見を否定するように言いました。クレアは「で、そうなるのを防ぐための起業ってわけよね。つまり人海戦術」と言いました。ライムは「ま、そうなんだけど……人が集まる気がしないし、なんなら、あたしらの手柄が下手したらなくなりそうな気がするんだよ」と溜め息を吐きました。そして「リン、なんか良いアイデアないか？」とライムは聞きました。

リンは「二人とも、そんな平凡な発想じゃ埋蔵金なんて一生かかっても見つけられないよ」と首を振りました。ライムはムツとして「なんだい。じゃあ、あんたにはさぞ素晴らしいご発想があるんだろうね」と言いました。リンは「当然なんだよ。それじゃクイズ出すからよおく考えてみてね。チャチャーン！ 『掘っても出ないものはどこにあるでしょう？』 シンキングタイムは特別に5秒あげるんだよ、ちなみにリンは一秒でバシユーンってヒラメいたから、お姉ちゃんたちには余裕過ぎる問題のはずだよ！」とやって「いち、にーい」とカウントダウンを始めました。クレアとライムは、それぞれ「わからないわ」「わかりませーん」と言いました。なにかしらの答えを言って合っていたときは「大正解！」とやって終わるのですが、もし間違えると「お姉ちゃん、こんなこともわからないの？ 年下のリンでも分かるのにか？ そっか、たぶんイジワルで変な答えを言ったんだよね。年下のリンでもわかるもん。じゃあサービスとして、もう5秒だけあげるね。いち、にーい……」がエンドレ

スに続くためです。しかし「わからない」と答えるつもりは「え、わからないんだあ。まあお姉ちゃんたちでもわからないことってあるよね。お母さんでさえリンがクイズを出すと、いつつも『わからないわね』っていうもん。それじゃ答えをいつちやうと、答えは、空、でした」と終わるのです。というところで、姉二人は正解の確信がないときには妹のクイズは「わからない」と言うことで時間の節約をしようとして決めたのでした。

ライムは「え、空？」と聞き返しました。リンは「そう、マイゾウキンはお空にあるんだよ。たぶん雲とかにカクれて見えないだけで、どこかの、たぶん天空の城とかに、たぶんマイゾウキンはあるんだよ！」と答えました。ライムは「あー、それ昨日観た映画のエイキョウだろ。お姉ちゃん知ってるぞ。一緒に見たし」と快活に笑いました。クレアは「うーん、まあどんな与太話も可能性はゼロじゃないってわたしは思っているけれど。リンの埋蔵金は空にある説は、ちよつと信じがたいかな。だいたい徳川とかの昔の人が、どうやってお金を空に預けたのよ。そんな技術は当時ないし、もしあったと仮定しても今現在まで浮かび上がらせるためには莫大なエネルギーが必要はずよ。つまり可能性は限りなくゼロに近いと、わたしは思うわ」と腕を組んで考える仕事をしながら淡々と言いました。

リンは「チガウよ！ 映画をみたからじゃないもん。空にはほんとうにマイゾウキンがあるんだってリンのカーンがいつているもん！」とやって、スタスタとお部屋を出ました。クレアとライムは放っておくわけにもいかずリンについていきました。リンはクレアのお部屋に入りました。クレアは「ライムはリンの部屋にいて」とライムにいうやいなや自分のお部屋に突入しました。クレア

は「リン、なんでわたしの部屋に入ったの」と問い詰めようとした。しかし、既にリンはどこにもいませんでした。

クレアは狼のように眼を鋭くして、お部屋を見渡しました。ベッド、机、椅子、本棚。そして、鏡。お部屋は全ていつも通りのように見えたが、しかし一点だけ普段と違うところがありました。それは成人男性の平均身長くらいの高さがある大きな鏡にありました。大きな鏡は動かないはずであるのに、なぜか水面のように揺らめいていました。これを見るとクレアは普段のソプラノ声からは考えられないアルト歌手のような声で「これは一大事ですわね」と唸って鏡に飛び込みました。いつのまにか、その肉体は人と狼を足して二で割ったような獐猛な生き物と化していました。

一方その頃、リンは岩肌から落つこちそうになっていました。「鏡がへんだつたから、とりあえず手を突っ込んで『こちら側』をカクニンしてからつっこんでみたんだけど……まさかこんな足場がほとんどない崖を歩くことになるなんて聞いてないよお。お姉ちゃんたち、心配しているかなあ」と、できるだけ崖下の景色を見ないように視線を上になりながら慎重に足を運びつつ呟きました。崖の下は黒い雲のみがありました。落っこちたらロクな目に遭わないのは違いありません。ただし上には、まるで本物の金で作られているような文字通りの黄金郷があったので「あそこから金銀財宝を持ち帰ってフウフゲン力をなくすの」と岩々を握る手や、まがりくねるようにして上へと続く人ひとり歩けるかも怪しいくらいに細い道を歩む足に叱咤をいれて、前へ前へと歩き続けました。そして、とうとう上へと辿り着いて、その黄金郷の様

子を見る頃になるとリンはあることに気付きました。「あれ、そういえばフダンより疲れていないかも。うん、だつてあんなに歩いたのにキンクツウにならないなんておかしなもの」と小声で言いました。そして、これは黄金郷の様子を見てのことですが「ここつて、まるで人間の国じゃないみたい。オオカミと人間を足して割つたような変な生き物ばかりなんだよ」とも言いました。そして、できるだけ足音を立てないように右足を黄金郷に一歩踏み出した瞬間、狼とも人もつかない生き物の鋭い眼が一斉にリンの方を向きました。百匹くらいはいいます。これはマズいとリンは来た道を引き返そうと後ろを振り向きました。しかし、そこにも例の生き物が鋭い目をリンに向けていました。もはや八方塞がりでした。前方にも右方にも恐ろしい生き物がいて、左方や後方には絶壁があつたのです。どう動いてもリンにマトモな未来がやってくると思えません。そうリンが立ち竦んでいるうちにも恐ろしい生き物は一步一步リンに近づいてきます。リンの目からは涙がこぼれていました。

「お母さんお父さんごめん！」と謝りながらリンは絶壁を飛び降りました。

そしてリンの落ちた先の地面には血だまりができました。ただし、それはリンのものではありませんでした。恐ろしい生き物のものでした。恐ろしい生き物は言いました。

「これもつて急いで。人狼はわたしが死ぬことを、その鋭い嗅覚でわかったはず。あなたを敵討ちしようとして、すぐにでもこの道を行って向かってくるわ。あと数歩で『あちら側』に帰れるとこに着地したのは幸いね。わたしたちにとつては不本意だけれど、あなたは向こうに帰つたらすぐさま鏡を床に叩きつけて粉々にした方がいい

わ。歳が二桁にならないうちに死ぬことを避けるためには……つて、なにぼうつと突つ立つてんの、はやくいっただいた！」

リンは元の世界に帰りました。そして心優しく恐ろしい生き物から貰つた忠告通りに鏡を壊しました。リンは自分の部屋へ戻るとベッドに横になりました。ライムの姿は見えなかつたですが、たぶんライムも自分の部屋に戻つたのだろうとリンは思いました。そして睡魔に意識を刈り取られてリンは眠りにつきました。

翌朝は休日だったため家族そろつての朝食でした。食パン、ベーコンエッグ、ほうれん草のおひたし、コーンポタージュが食卓に並んでいます。

リンは「そういえば、どうしてリンにはリンつて名前を付けたの？」とお母さんに聞きました。お母さんは「それはね、あなたが凜とした、りりしい人になつてくれればつてお父さんと二人で考えた名前なのよ。そうよね、お父さん？」と言いました。お父さんは「そのとおりだよ、お母さん。はは」と笑いました。

リンは「なんだか今日は機嫌がいいね」とお父さんに聞きました。お父さんは「それは当然さ、はは。ちょうど、このリビングの机で今日見つけた宝くじが一等だったからな。もう借金の心配はない。なに、いつ買ったかは覚えてないが、おそらく酔つていたときに買つていてそのまま忘れていたやつだろう。はは」と言いました。お母さんも、喜ばしいことだというように激しく頷きました。

リンは「そういえば、ライムには何でライムつて名前をつけたの？」とお母さんにもう一度聞きました。お母さんは「それはね、ライムが……えーつと、どうだった

かしら。あらやだ物忘れかしら。どうしてだつたかしらね、お父さん」と言いました。お父さんは「どうだったかな。おかしい。覚えていない。そもそも愛しい娘に、そんな今頃のキラキラネームなどつけるはずが……」と首を傾げました。

それまで黙っていたライムは「なにいつてんだよ。別に名前なんて、どつちでもいいじゃないかさ。なによりも大事な二人娘だろう？ あたしたち。ねえ、リン」と言いました。リンは「そうかもしれないわね」と言いました。

あとがき…これつくらーいの？小説原稿に？現代と童話をちよいつとつめて？矢来篝(やらいかがり)ふーにアレンジして…：…な作品でした。お楽しみいただけたら幸いです。童話ということで筆者の精神年齢も幼くなりまして、なんだか気分がふわふわして、まさに夢見心地状態で書いていたんで、ちよいと各所でキレが足りなかったかもなーふわつとさせすぎちゃったかなーとちよつと反省しております。まー童話だし、そんな克明な情景描写いらんやろ！と言いつてもしております。実際いらんやろ、と半分くらいは思っています。あ、それと気分ゆるふわなのは深夜に書いているせいもあるかもですね。めちやくちやねむいはずなのにーあれータイピングしてるせいか妙に眼が冴えてるーおつかしいなーって気分です。ちなみに現在時刻は午前3時54分、あつ、いま55分になった。あつあのあとがきなんで縦書き漢数字過激派の人はお目汚し失礼いたしますが許してやって下せえ。わたくしやそんなところまで、もう気がまわらんですよ(まわつてる)。あとこれって今更ですけど新歓号？春号？どっちだ？どっちも？的なのやっなんですよね。みんな三文文士会はいいところだぞーみんな優しいしみんな面白いしみんな常識的でエキセントリックなんだぞーいところだからみんなきてよなー(もしかして三文文士会側のハードルも新入生側のハードルもあげてる？すまんの)。そんなわけで流石にあとがきに1ページまるまるさくきはあんまりないので、こころで締めといかせていただきます。

ばいばい！

またね？